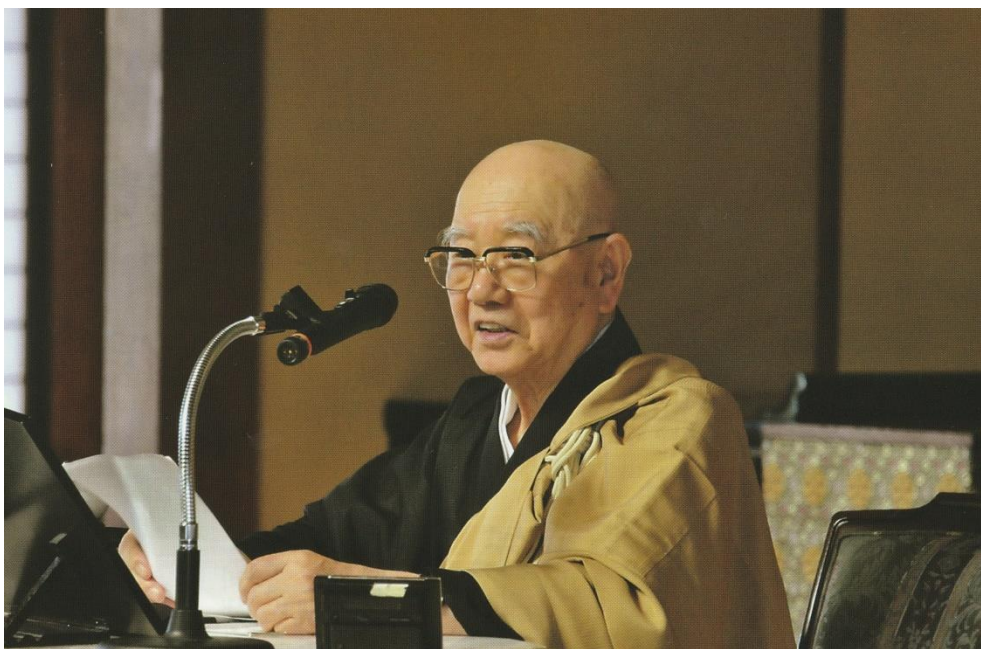


龍泉院参禅会会報『明珠』第六九号附録（平成三〇年四月八日刊行）

「私って何でしょう」

龍泉院参禅会二五周年記念講演会
奈良康明先生講演録

平成八年二月四日 長全寺飛雲閣



「私って何でしょう」

牛と子供を持つな

椎名先生とお話しを致しまして、結局決まったテーマが「私って何でしょう」とまあこういう事なんです、実は「私って何でしょう」というのは、いろんなかたちで私の若い時からの疑問のひとつになっていたテーマでもあるんですね。

今ご紹介しましたように、私インド屋でございましてね、インド屋という商売があるわけではないですけども、インドの宗教・仏教を中心に勉強をさせていただいているんですけども、二七歳の時にインドのカルカッタ大学への留学をする機会を得ました。三〇歳まで三年三ヶ月強留学をいたしまして、若い時でもありますし、とつても楽しゅうございました。まあ、いくつかその時代の原体験、とでもいうものがあるんですけども、そのなかのひとつにヒンズー教の行者さん、素晴らしい顔をした行者さんに出会ったということがございます。

現代の行者さんでありますから、お釈迦さんと全く関係ないですけども、農村を歩いていたしたら行者さんがやって来ます。顔を見ましたら素晴らしい顔なんです。その目をパチッと開けていて黒々としていて鼻筋

とおつて、何ともいえない知的な閃きがある。知的な顔というと、どつちかというところ冷たい感じがあるんですよ。でも何ともいえない温かさがあつた。こう胸を張って歩いて来る姿勢がものすごく印象的でした。

いつのまにかその行者さんを見送りながら、私の頭の中にお釈迦さんとその行者さんがダブリました。それからインドで学生時代に、辞書を引き引きインドの原典の釈尊の言葉なんていうのを読んでおりました、釈尊曰くなんて出てきますと、いつのまにかその行者さんの顔が出てきました。今までは単に釈尊曰くというんで、私とは関係のない人のように読んでいたのです。ところがそれから後になりますと、そのお釈迦さんがその近所の行者さん顔にすり変りして、非常に親しみができて、なんか身近なものに感じました。「お釈迦さんそう仰るけど無理ですよ、とてもこつちにはそんな難しいことでできない」とかね。「お釈迦さんそれよく分かる」なんていうようなことを言うようになる。

いふなれば、文献を通じてお釈迦さんと色々な質疑応答をするようになる。何か私がこう問題を投げかけていきますと答えてくれる。答えてくれるつたつて、私の頭の中にイ

メージしているお釈迦さんが、その現代のヒンズー教の行者さんの顔形をとつてあらわれて、答えてくださる。ただそれだけのことなんですけれども、私としては自分の心の中に思い出て来る色々な事を、お釈迦様にぶつけては答えが返る。またぶつけては返ってくる。分かんなかったことが半年ぐらい経つたら、「あつ、お釈迦さんこれで良いんだよね、分かった」なんていうこともあるし、逆に「あれ、お釈迦さん、これ分かったつもりになってたんだけど、おかしいですね」なんていうようなことも出てきました。

そんなような癖が実はインドにいた時からございまして、そうした中のひとつに未だに記憶に残っておりますけれど、お釈迦さん言うんですけどね、「牛を持つものと子供を持つものは、牛と財産に憂え、だから牛と子供は持つな」と言うんです。牛というのはインドでは財産のことです。子供は子供です。それを言うてるんですから当然社会生活をしている人に違いありません。修行者は子供さんいないのですから、財産も無いんですから。一般の社会生活をしている人にお釈迦さんが、財産を持つ者は財産に悩む、子供を持つものは子供が悩みである。だから「財産と子供を持つ



龍泉院参禅会二五周年記念で講演された奈良康明先生

な」なんて言うんですね。人間は自分のことさえわからない。「財産とか子供と言うのも所詮は他人なんだよ自分の思い道理になるわけがない」なんておっしゃるんです。「お釈迦さんそれないでしょう」なんて私言ってたんです。

私は今独身で家庭なんかいいけども、それでも私は寺に生まれて師匠の後を継いで住職になる、日本に帰ったら嫁さん一人ぐらいもらうだろう。嫁さんもらったら子供もできる

だろう。子供ができたならんらの財産もないということはあるえないし、子供ができればうれしいこともあるし、楽しいこともあるけども、悩みも当然ありますよと。

社会生活をやるという人間は財産と子供に悩む、だから財産と子供は持つな。「それじゃあ社会生活全部止めるって言うんですか」何て突っ掛けてみたり、同時にそうしたことを言う状況というのが、おそらくバブルで財産が弾けて失意のどん底にある人、あるいは子供さんに死なれちゃってももう立ち上がれないでいるような人に向かって、お釈迦さんが言っている言葉だなあって聞くと、それなりの説得力もあるんですね。

人間は自分で自分が分からない。自分で自分がどうにもならない。ましてや財産や子供など、俺の財産だ俺の子供だたつて所詮他人じゃないかと、自分以外じゃないか。そんなものは自分の思い通りにならないだからあんまり拘るな。一種の慰めの言葉とみれば分からんわけはないんですが、でもね、人間自分で自分がどうにもならない、自分で自分が分からない。だからちよっと凄い表現で印象に残りましてね。

裸になって考える

そんな事があるもんですから、私の頭の中で「私って何でしょう」なんていうのは、実は色々なかたちで疑問として残っているという感じがございましてね、今日のテーマなんですけども、自分を見る、私って何でしょう。

「私って何でしょう」と言ったって、一番物理的な意味で簡単なのは、鏡見れば良いんですけれども、鏡で見た自分は本当の自分じゃないんですよ、だって左右逆ですもの。所詮映像でしかないでしょう。

それじゃあ「私って何でしょう」、私は鈴木です。名前ですわ。これは「私って何でしょう」じゃなくて、「私って誰でしょう」ということにしたいのですけども。ここで「私って何でしょう」というのは、なにも職業を聞いたり、何を考えているかということじゃなくて、「私という存在を支えているのは何でしょう」と、そういう意味ですからね。少し洒落た言葉で言えばアイデンティティー。別の言い方をすれば生きがいと言ってもいいですね。

私の生きがいは鈴木という名前です、なんていう人はあまりいない。ただご自分の名字が、私のところは三十何第続いている姓は源

氏、何とかの後裔なんと言つて、私は華族の出身である、私は貴族である、私はこういう名家に生まれたことが私の誇りである。なんと言つてその人の生活を支えているのならばある意味では「私つて何でしょう」、私は家柄がいんだというのが支えになつていいのかもしれません。しかし、どうも名前というのは自分支えているとは思われない。最近夫婦別姓なんというんですけども、いろんなことで名前変えちゃうことなんかあるんですが、名前変えたら人間変わっちゃうからなくて、そんなことは無いんであります。

「私つて何か」、私は何とかという一部上場会社の社員であります、エリートであります、なんていうのもひとつ生きがいになるかもしれませんが。しかし定年になつて辞めちゃうたら、その人の生きがいが無くなっちゃうなんていうのは、本当の意味での生きがいじゃないんですよ。

私は日本人である。確かにこの間アトランタのオリンピックがあつたんですけど、私も外国の生活永うございます。外国で日章旗を見ると訳もなく感激をする。「あつ、日章旗、僕の国の旗、いい旗だなあ」という感激、私にも経験があります。特にオリンピックか何

かで日章旗がagrりますと、在留邦人の方が涙を流して喜ぶなんてよくありまして、よく分かります。

だけでもそれじゃ日本人であるということが生きがいかというと、その人が向こうの女性に惚れまして、向こうの国に帰化しちゃつたらどうなるのだろうか。どうもこれが私を支えているアイデンティティーですとか、これが私の生きがいですという、勿論それぞれにそれぞれの生きがいがあつていいんですけども、どうもそういう自分の存在の外側のもを取り上げていきますとね、いくらでもそれが変わっちゃう。変わるたびに生きがいが変わってきたんじゃないやあ、本当の私の正体なんてことにならないじゃないのかな、とそんな様な気が致します。

石田晴夫先生という方が、私は何のタロベイですとか、金持ちですとか、こういう素晴らしい息子の母親ですとか、日本人ですとか、こういうんで私を支えているような感じになつていてということはあるけども、実はこれは着ている着物みたいなもの。むしろ着ている衣装を剥いで、裸になつちやつたところまで一体俺つて何だろう、ということを考える必要がありはしないかと、問題提起をされてい

るのでございます。

自分も他人も幸せに生きる

そんなことを考えまして改めて鏡を見ますと、今度は自分の外側の着物じゃなくて、自分が今どんな感情の中にいるのかと鏡を見ると、ある程度分かります。だから鏡を見るのもそれほど「私つて何でしょう」という事に対して、全く意味がないとは思えない。

私の存じ上げていた方で私より先輩の方で、もう三、四年前に亡くなられました秋山里子先生という方がおられる。中年で志を立てて駒澤大学においてになりました。駒澤大学で仏教を四年間勉強してから、スイスの方でユング系の精神分析の研究所の方に行かれまして、帰つてこれられて本も七〇何冊お書きになりました。実際にカウンセラーとして色々なご活躍された方なんです。

秋山さんと一回話をしていたら、「奈良さんね、白雪姫の話し知ってる」。「知ってますよ」。「白雪姫の話の中に白雪姫の義理のお母さん、魔法の鏡を持つていらっしゃるんですよ。その話し覚えてる」と言うから、「覚えてますよ」。鏡よ鏡よ鏡さん世界で一番美しい人、この人というのは女性という意味であります、

世界で一番美しい人は誰。と言つて自分の顔がポーッと出てくると喜んで。後に白雪姫が立派に成長致しまして同じ質問をしたら、ポーッと鏡の中に浮かんできたのが、なんと自分の顔じゃなくて立派に成人した美しい白雪姫の顔でした。途端にそのお母さん額から角が生えましてママ娘いじめが始まった、とまあと誇張して言えばそういうことです。

「これは現代の話しよ」と言うからね、「何で」と聞いたら、「最近ね、子離れしないお母さんが多いの」と。「私のところのカウンセラーでよくそう言うですね。お母さんは来ないですけど息子さんが来る」って言うんですね。それも鏡よ鏡よ鏡さん世界で一番息子を愛している人、この人も女性です、愛している人は誰って聞いて、自分の顔が出てくる間は無難なんだけれども、息子さんが結婚いたしましたして、出てくる顔がお嫁さんの顔になります。途端にお母さん額に角がはえて嫁びりが始まる。

「秋山さん、姑と嫁の話し何ていくらでもあるんで珍しいことじゃないでしょう。」「そりゃ昔からあるけど今は質量ともに違う、大変なのよ」なんという話しを聞いていたら、そのうちに冬彦さんが出て来まして、ああそ

ういうもんかな、なんて感じが致しました。そうなりますとね、鏡を眺めますと鏡に出てくる自分を見て自惚れてみたり、嫉妬してみたりなんていうことになる、ある程度鏡を見るっていうのも「自分とはなんだ」というのを見るひとつの役目にはなるのかな。まあそんな気がしなくてもありません。

これは実は鏡じゃないんですけども、似たような話で、ちよつと凄う話っていうのがありましてね。オスカー・ワイルドという作家がございまして、あの人に『ドリアン・グレイの肖像』という小説があります。これがちよつと素晴らしいというか、ちよつと凄まじいストーリーなんです。

ドリアン・グレイという若さに満ち満ちたハンサムな青年がおりまして、そして自分の部屋の壁に肖像が掛かっている。いろいろなことがありまして、生きている人間の自分と壁に掛けられていた肖像の中の自分と取り替える。そうしますと自分は肖像画の中の自分、現実の世界に出て来たもんですから、いつまでたつても輝かんばかりの若さと美貌に光り輝く若者。絵の方の人間は変ろつとしていく。とにかく年をとらない一種の夢です。夢です。夢であんまり本当に現れても困っちゃ

うのでありまして、若い人はいいねぐらいに私も良心的に言いますけれども、これから二〇代になって女性にもてるなんて、よしてくれよ面倒臭い。これからまた二〇代に戻つて四〇年五〇年生きるなんて面倒臭いよ、なんて気がするけど、それは生きた人間だからそうなんです。だから夢なんです。ええ。

若けりゃいいねなんて誰だって思う。それが実際に現実になりまして、若さを謳歌して二〇年三〇年経つんですが、生きているドリアン・グレイはそういう訳ですから年をとれません。いつまでも若々しい。かわりに肖像の中の額中の肖像画のドリアン・グレイが、本物のかわりに年をとっていく。

そうしますとどうせそんな生活をするわけですから、ろくなことしないんです。段々年をとるにつれて欲が深くなり悪いことをし、ずるいことも覚えて、段々人間の精神が荒廃してきますと、それが顔に出てまいります。生きている本人はいつまでも若々しいんだけど、肖像画の中の自分が段々醜くなつていく。

五〇を過ぎた頃にひよつと自分を見上げましたら、自分の顔なんですけれども、なんともいえない人間の邪悪さが顔に出た、醜い顔

の男が肖像画にあつて「これが本当の俺なんだ」と思つたら、耐えられなくなつて、夢中になつてその肖像画をナイフで切り破るわけですね。とたんに本来の自分に戻りまして、そこにナイフで切り裂かれた醜い顔のドリアン・グレイの本物が横たわりまして、切り裂かれた額縁の中のドリアン・グレイは、若さを誇る若い時の肖像が切り裂かれていた、とまあこういうちよつと恐いストーリーなんです。

しかし自分の心の中をそういうふうに見つめてみると、色々な面が分かつてきて、これ私どもの自らの体験でもあると思うんですけど、「うれしいな」と思つてにこにこしてたら、鏡で見た顔だつて楽しい顔でしょう。あの子が憎い、あいつをもう殺しても飽き足りないなあんで言つて、もういらいらしてる時の顔を自分で見たら、やつぱりいやでしょう。だからそういう面から言えば「自分んで何でしょう」なんていうのは、鏡で見るとある程度わかるけれども、でもだいたい私どもそういうとき鏡見ないんです。

鏡をちらつと見て、いやらしい嫌悪のある顔しているなあ、「これが俺の顔かな」と思うと、途端にいやになつちやつて見るの止めち

やいますよね。そこんところをじつくりと腰を落ち着けて、「私がこんないやらしい顔をしているのはよろしくない」と言えれば立派なんですけども。

でも考えてみれば、自惚れていたり、嫉妬に狂つていたり、他人を憎んでみたり、そんなようなことをやっている自分が、本当の自分を実現しながら生きている、自己実現しながら生きている、なんていうことにはいきませんでしょうね。やつぱり本当の自分を曝け出しながら生きている。そこに自分というものを確かなものとしてつかんでいくという時になると、やつぱり自分も幸せ、そして他人様も幸せ。そうした生き方をしているところにやつぱり本当の自分というものを実現しながら生きていく。むしろそういう自分も幸せ、他人も幸せに生きていくというプロセスの中にこそ、本当の自分というものを見出していく。そういうことになって来るんじゃないかと思つんですよ。

禅とは素直な生き方

ですから、私は仏教の方の立場で、本当の意味で自分を実現していくというのは、素直に生きていくことだと思うんです。素直に生

きていくたつて、その素直の中身が問題だから、これから少しづつ喋っていくんですけれども。

私は、これも若い時でしたけれども、非常に印象に残った文章、正岡子規の文章というのは、正岡子規は「承知の通り小説家であり、詩人であり、三〇代の半ばで死んでしまいましたが、あの人が亡くなる半年くらい前に書いた『病牀六尺』あの病気のベッドにいるベッド六尺という畳一畳分、『病牀六尺』というものがございまして、その中に書いたんですね。禅の教え、禅というのは平気で死ぬことを教えるのかと思つたら、そうじゃなかった。禅というのは平気で生きていくことを教えるもんなんだということ。

これは私びつくりしまして、私も禅寺の息子に生まれ禅寺で育つてきた人間、今でも東京の下町の小さな寺の住職なんでありますけれども、子供の時から禅というものに関わってはきました。でもしよつちゅう耳に聞くのは、例えば昔の沢庵和尚と宮本武蔵だとかいふ話がある。禅を修行したお坊さんは、火を見ることまことに平然と火を見る、いつ死んでもいい、死ぬ時が来たら黙つて平気で死んでいく、なんていうような勇ましい話が

出ますでしょう。

快川和尚などという人は、燃え盛る楼台の上で、心頭滅却すれば火もまた涼しい、なんと言って焼け死んでいったなんて話もある。なんか格好いいんですね。格好いいんですけれども、私、最近こうした生き方というのが果たして本当の禅の生き方なんだろうかなと、すごく疑問に思っている。

勿論、快川和尚というのは偉い方でありまして、快川和尚にとつては快川和尚のその死に方が、素直な死に方なんですから、それでいいんですよ。なんもそういう死に方が全体的かと言ってるのではないんですけれども、なんかいかにも禅というのは「死を見ること鴻毛より軽し」、いつ死んでもいいんだ、みたいなとっても勇ましい言葉がある。

あなたは禅のお坊さんで修行をしているから、ガンの宣言をされてあと三ヶ月といった時に「なんともないでしょう、平気で死んでいけるでしょうね」なんて愚かな会話も、実は私の周りになかったわけではございません。「はーん」と言っただけで死んでいく坊さんもあるかもしれない。しかし「はーん」と言っただけで死んでいけないから、そのお坊さんは駄目なんだとも私は言えないと思います。もっ

と自分自身に素直な生き方というものが禅の生き方で、それが私どもの生活の場であるならば、やっぱり素直に生きていくきわめて前向きな生き方、決して肩肘張ったようなものじゃない生き方、そうしたものはやっぱり禅の生き方じゃないのかなと私思うんです。

福は内鬼も内

そのようなことを考えますと、どうしても人生色々ありますでしょう。だから歌うんですよ「人生色々」って。流行歌の中には、仏教の目から見ると素晴らしい言葉が沢山あるんです。「わかちやいるけどやめられない」とか、「押して駄目なら引いてみな」とか、「世界は二人のために」あるとか。これはそれぞれ仏教の立場で解釈したら、すごくいい言葉がたくさんあるんです。作った人も唄っている人も意識していないでしょうけどね。つまり良いこともあれば悪いこともある。善悪が入り交じっている人生です。

「吉凶あざなえる縄の如し」なんて、良いことだけ自分の方に来る、悪いことは全部向こうへ行っちゃまえ、と言ったって無理でしょう。だからこそ二月四日の節分をすると意味がある。「鬼は外、福は内」と言うね。だつて

私もしょっちゅう「福は内、鬼は外」と毎日やる。だからそれがかたちになって出るんですけども。私の友人で福と鬼、良いことと悪いことが対になっているもんだから、悪いことが向こう行っちゃうと良いことも一緒に引っっちゃう。逆に悪いことを呼び込むと良いことも一緒に来るって言うんで、「福は内、鬼も内」と言っただけ分する人もいる。いや、本当です。これはちよつとしてひとつの見識でもありますかね。そうかと思うと、私の学生で後でヒッピーになったんですが、「先生面倒臭いですよ、福も外、鬼も外」と言ったなんて笑い話もあるんですけども。それぞれの考え方もあるんですよ。

要するにいろんなことがある人生なんだ、悪いこともあるんだ。ただその悪いことがあった時に、それに振り回されちゃって、ベソかいて生きているようじゃ前向きな人生にならない。そこにはやっぱりひとつの発想の転換というのがなければならいんですが、この発想の転換っていうのが、こうすることができるといのが、人間の素晴らしさであると同時に難しいところでもあろうと、私思うんです。



龍泉院参禅会二五周年記念で同じく講演された板橋興宗老師

夏は暑いと思い定める

こういう話しになりますと、いつも私は大変印象深いエピソードを思い出すんです。私ある夏のとっても暑い日の午後、私のお寺を出て外へ出かけていきました。門の外から近所の一八・九の青年が入ってきました、もういちやんの時から知っている子で、もういたずら小僧でね、町寺の墓地がありますでしいう、お墓の上をピョンピョン飛んでまし

てね、「こら危ないじゃないか」なんて私怒鳴ってたんです、一七・八、一八・九でしたかね。なんか用があったんでしよう、家に入ってきました、「先生お暑うございます」なんて挨拶してくれました。「やあ暑いね」なんて言いながらヒョイと見ますと、彼氏Tシャツを着ておりまして、Tシャツの前に墨黒々と何か書いてある。何だろうなあと思って見まして、こう近づいてゆきましたけど止めました。

「夏は暑い」。私頭の中にピカッと光るものがあった、あつ面白い言葉だなあと思いました。でもまあその時にはそのままですれ違いながら「いいシャツ着ているねえ」「これですか、僕買ってきたんですけども似合いますか」「うん、似合うよ」と、私でもそのぐらいのリップサービスはするんですが、そんな時余計なことを言った。「それにしても今日は暑いよなあ、嫌になっちゃうなあ」なんて言いながら私行こうとしたら、その青年がぴたりと足を止めて、私の方を振り向きましてね、「先生それは暑いですよ、先生ね今夏ですからね。夏は暑いんですよ、書いてあるじゃないですか。だからね、暑い時には暑い暑いなんて先生文句言ってたって駄目なんですよ」。「そうだよな」って、まあちよつと大タコに

教えられたような感じがありましたけれども、苦笑いしながら「そうだよな」って言って別れた。

実はそれだけのエピソードなんです。それだけのエピソードなんですけれども、つくづく考えるに、夏は暑いという言葉は仏教の前向きな生き方のいるはであると同時に、一番お終いの奥義じゃないかなという気もしてきました。何故か、少しそれ考えてみたいんですけれども、「夏は暑い」暑い時にどういう風にしましょう。私色々考えたんですけども、暑い時に私どもの暑さに向かう姿勢というのは、三つしかないと思っている。一つはなんにもしないこと。「暑いなあ嫌になっちゃうなあ、早く秋が来ないかなあ」とぼやいているだけ。無関心・無気力。これも暑さを迎えるひとつの姿勢ですが、これは暑さに対して立ち向かっていくという積極性がないから、これは論外と致しましょう。

二番目、最も普通なのはクーラーをかければいいじゃないかということ。クーラーというのはすごく便利です、有効です。ですから大いに使つてよろしいものでしょう。ところがクーラーというのは万能じゃないということも、心得ておかねばならない。はい

話が、建物の外だつたらクーラー効かないわけですから。なんにも建物のないような、例えば農村などの道を、ドレスアップして重い荷物を持って道歩いているとします。汗が出て来てこんななつて「気分が悪いなあ」なんて言いながら、暑さを呪いながら歩いてきます。やれうれしや喫茶店があつた。クーラーも効いているのでそこに入りまして、アイスコーヒーかなんか飲んで、「まあいいや急ぐ旅でもないし、二時間も経つたら夕方にもなつて涼しくなるから、そしたらまた歩いて行こう」。こういう時には便利ですね。

ところが人生の暑さということを今考えているのですが、人生の暑さの時に、クーラーって何だろうと言つたら何になりましょう。例えば突拍子もない例なんですけれども、子供に死なれちゃつた、なんていう人にとつて、悔しくつて悲しくつて心が傷んで仕方がない。クーラーをかけましょう、大変な暑さに悩んでるわけですが、スイッチを入れましょう。具体的になんでしょうね。おそらくお酒飲んで二・三時間寝ちやうぐらいじやないでしょうかね。確かにグーグー寝ちやてい間は悲しみを忘れていますけれども、二・三時間たつて目が覚めます。目が覚めなかつた

らこれまた事なんで、目が覚めると悲しさは余計倍増して胸をかみますがね。どうも同じ様にクーラーというのは、暑さなら暑さを一時的に遮断してくれるもののような、そんなもんでしよう。

でクーラーっていうのは何でしょう。外から暑さがまいりますよね、それに対して私はなんにもしないんです。ただスイッチをパチンとひとつ入れるだけなんです。そうするとクーラーが働いて暑さを遮断してくれます。つまりクーラーというのは外から来る暑さを何か機械の力で遮断して、自分はゴロツと横なつて寝つころがって、楽をするというそういう思想です。

だけでもそれはそれで結構で、使える間は使つてかまわないんですけれども、それは暑さの一時の解消でしかないんじゃないかなという気がする。本当の意味での暑さの解決にはならないんじゃないかと。

じゃ本当の意味での暑さ解決するにはどうしたらいいかといったら、そこに第三番目の「夏は暑い」という自分への言い聞かせ、発想の転換があり得るわけです。同じ様にドレスアップして道歩いて、汗がだらだら出てきて暑さを呪うんですが、考えてみたらまわ

り見ても喫茶店はない、そこでへばるわけにもいかん。どうしたらいいかと言つたら、まあしようがないよなあ、この暑い時期にドレスアップして重い荷物持つて道歩いているんだから、汗が出てくるのはあたりまえだと、暑いのは仕方がないんだと。こういう風に心に言い聞かしちゃつて、心に納得したら、汗が吹き出て来たら拭き拭きしながら、胸を張つてどんだんどんだんに歩いていく。そういう姿勢がとれば、かえつてそこに暑さを克服する道が開けてきますでしょう。

夏は暑いと思ひ定める。夏は暑いものと受け止めちゃつたら、かえつて心の方のガードができます。いうなれば、この第二の暑さに対する対処の仕方というのは、クーラーと逆です。外から来る暑さを遮断しません。どうぞいらつしやい。全部受け止めておいて、その代わり自分の心の中のガードを固めることによって、その暑さを乗り越えていく強さを、自分の身につけていく。そういう生き方だつてあるわけだし、これはもういろんなかたちで例を挙げろつて言つたら、いろんな例が挙がるんですね。また知らず知らずに私どもそういうことやつていると思うんです。

例えば、皆さんにしたつて、こんな荷物持

つていやなところの道歩かさられて、汗だくになって歩いている時は不愉快ですよ。それが二五度ぐらいの暑さであっても暑さを呪ってます。ところがなに、ご自分の好きな時になつたら、ゴルフのクラブ振り回してみたり、テニスのラケット持ったりしてね、外行つて炎天下、そんなスポーツをやりまして汗をだらだら流しながら、「暑い時にスポーツをやつて汗をかくつて気分いいね」って仰つてるじゃないませんか。

二五度の暑さと三五度のテニスやつている時の暑さと、どっちが暑いかといったら、三五度の方が暑いですよ。暑いんですけれども、どっちが体に堪えるかっていったら、二五度の方が堪えちゃう。嫌々やつているから、それにそういうひとつの人生の知恵かもしれない。そういうこと私も普通にやつてるんです。

とかく人生暗く暗く見がちである

ヒョイと思いつきましたけども、今年の春でございました。東京の下町のおじいちゃんが亡くなったんでお通夜に行きました。どしやぶりの雨のなかひどい雨でして、下町の小さな商店街です。歩道も狭いです。そこんと

こへ大きなテント（一枚の布きれ）を張つて、並木にかけていて、少しでも来る方が濡れないようにつて、やったはいんですけど、なにせどしやぶりの雨なもんだから、そのテントに水がたまつて引つ込んじやう。そこへ弔問に来た人がなんかにぶつかつて、傘で突つついちゃつた。そしたら水がじゃつと零れた所へ、黒い喪服を着てみえたご夫人が、頭から水がかぶつちやつた。そこへまた私が行き合うなんて、来る方も大変、来ていただく方も大変。

「ひどい雨ですね」なんてみんなで話している時に、そこに来ていたあるご老人が言つたですね。「やつぱり死んだおじいちゃんいい人だったから、こないいいおじいちゃんも亡くなつて、その死を哀しんで天も泣いてくれる涙雨」なんて言うんです。

実をいうと、お葬式かなんかの時に雨とか雪になると、天も故人の死を悼んで涙を流してくれている涙雨っていうのは、昔からある表現なんです。表現なんですが、そこそこへふつと出て来るっていうのがたいしたものだと思ふ。だつて「ひどい雨ですね」と言つて雨を呪つたところで、雨やまないんですよ、雨降ちやつているのが現実なんですから。そ

したらその雨を、故人の死を悼んで天の流してくれている涙雨つて言つた方が、明るいじゃないですか、同じ雨でも。

翌日、告別式がからつと晴れちやつた。じや天は泣くのをやめたかといつたら、そのおじいちゃんが曰く、「故人の徳のせいだね。皆さんが困るつというんで、今日はからりと晴らしてくれた。やはり故人の徳の高い由縁である」。こういう考え方つて私好きです。すべからくそう考えなくちゃいけない。似たような話は幾らでもあるんですよ。

娘さんが二人いたつていう話。一人は傘屋さんに嫁にいつて、一人は下駄屋さんに嫁にいつた。来る日も来る日も泣いている。「どうしたのおばちゃん」と聞いたら、「今日はね、お天気がいいでしょう、そうすると傘が売れないだろう。傘屋にいつた娘がかわいそうで」と言つて涙をこぼしている。

雨になりました、そうしたらまた泣いているんです。「雨が降ると下駄が売れない、下駄屋の娘が悲しんでいるだろうにかわいそうに」と言つて泣いているつていうんです。

だからおばちゃんそれ発想が逆だと。雨が降つた時には、最近傘も安くなつて、地下鉄やら駅を出たところで雨に降られたら五

百円か七百円ぐらいでいくらでも傘売って、皆さん気軽に買っていく。雨が降ったら傘がたくさん売れて、傘屋の娘はくほくほしているだろうなって、雨の時に傘屋の娘さんのこと思ったらいいじゃないか。お天気になったら、お祭りも近いし下駄が売れて結構と、下駄屋の娘さんのこと考えたらいいじゃないかって。「そうよね」っておばあちゃん考えて、その通りにしたら、それから毎日笑って過したという。

勿論作り話です。勿論作り話ですが、この話の面白いことは、「こういう作り話だ」って言うかたちでお喋りすると、皆さんふふんとお笑いになって、「そうですね」ってお分りになるけれども、なにをはからん、私ども毎日の人生の中で、意外と雨の降る日に、傘屋の娘を思わずに下駄屋の娘さんを思っ、涙こぼして嘆いているおばあちゃんの姿と私どもが、オーバーラップしてくるんですよ。本当よ。

ご自分でお考えになって「あらんさい、明るく明るくなんて見れないんで、暗く暗く暗く暗くって見てく時があるじゃないですか、私ども。やつぱりそれよろしくないですよ。やはりひとつの現実にあつちやつたら、

その現実はやつぱり現実として受け止めて、明るく受け止めて、前向きに生きていく努力だけはしなくちゃいけない。

必死に前向きに生きているお嬢さん

そうしたことを、仏教ではいろいろな言葉で説くんでありますけれども、私、比較的最近、非常に印象深いエピソードを、私の友人から聞きました。

私の親しい友人のそのまた友人のお嬢さん、直接私存じ上げないんですが、そのお嬢さん二・三・三でお気の毒に交通事故にあいまして、片足を失いました。大変だったようですね。すぐ病院にかつぎ込まれ手当を受けたんですが、片足を失はなければならぬということが分かったことの悲しさ。それから事故を起こした運転手さん（トラックの運転手さん）とのいろんな話し合い、ひっくり返るような大騒ぎになったんですよ。

そうしたことが落ち着いた頃に、私の友人がそのお家へ行きまして、お嬢さんが出てまゐりまして「あら、おじさんいらつしやい」、赤ちゃんの時から知っているお坊さんですかね、「おじさん」と言って彼女は呼よんでいんです。「私は本を読むのが好きなんです。

ところが今までお勤めがあつたから、なかなか好きなように本を読む時間もなかったけど、ほら今こうなつてお勤めも辞めたし、家にいるから思う存分本が読めて、私とつてもうれいんです」「こう言つてにつこり言うんですよ。

それからしばらくしてから行きましたら、義足がついておりました。不自由ですけども歩けます。彼女は「私今お料理にこつています。お料理というのは、インスタントで時間も何にもかげずにちよこちよこやつたら、美味しいものができない。仕込むにしても、煮込むにしても、揚げるにしても、たつぷりと考えて時間をかけてやると、手間暇かければかけるほど、家の人が美味しいねと言つて食べてくれるの」。そのへんのが本当に明るく、「テレビを見たり本を読んだりしながら、今お料理一生懸命やつてんですけれども、とっても楽しいのよ」と、言つてにつこりと微笑んだつてこう言うんですよ。

私の友人が「気丈なお嬢さんだよなあ」つて、私にその話しをしてくれました。私も同感でありました。私も同感だらうかといども、しかしそう事柄は、簡単だらうかという気も致しました。人間ですもの、事故に遭

いまして愚痴が出てこないわけがないと、思うんですよね。むしろ人間というのは、愚痴をこぼしこぼし生きているのが、私人間だと思えます。

そのお嬢さんにしても、話を聞きますと、買い物に行く時に長距離電話が来て、その電話をかけていたんで五分か一〇分遅くなったので、急いで行かなきゃっていうんで、普段は通らない近道を通って行ったら事故に遭ったと、こういうことらしいんですけれども。

もしもあの時に電話がもう一分遅く、私が出ちゃった後で来たら、私普通の道へ行ってたから、事故に遭わなかったらうにか。遅れてもいいんだから、普通の道をいったら事故に遭わなかったんじゃないかとか。もしもあの運転手さんが、前の日徹夜してたなんていうことでなかったら、もっと大丈夫だったんじゃないかとか。今更言っても詮無い愚痴であることを知りながら、もしもこうであつたらなんていうものが出てこないわけないですよ。

あるいは、若いお嬢さんこれからの人生を考える時に、私も今までと同じ様に友達とスキーに行きたいとか、外国ツアーに行きたいとか、何々したいという、これも愚痴に近い

かもしれませんけど、ありますでしょう。

こういう深刻な話をしながら冗談めかすと悪いんですけれども、私は人間というのは、いつもお魚屋さん開業しているって、言いたいんです。いつも鱈と鯛ばかりで生きています。何々でこうであつたらと、徒に過去の仮定法で喋るんです。ああしたい、こうしたいって夢みたいないなことを。いずれにしても言つて詮の無い愚痴なんです。人間だから愚痴はこぼしたいんだけれども、愚痴をこぼしている人生って決して明るくないんですよ。

ですからおそろく、私、そのお家では両親をはじめとして皆さんが、「でもね、残念だけれどしょうがないじゃない」かと。とにかく身体不自由になってしまったというのは、今更どうしようもない現実なんです。それをもしもこうであつたらなんて言つたって、何も前向きな生き方が出て来ないんだから。むしろ身体不自由になったという現実を踏まえた上で、その上でどうやつたら自分なりに納得できる人生が持てるのか、それをこそ考えよう。おそろくそういうお話しをされているんじゃないかと、私思っているんです。

だからこそ、そのお嬢さんがその親しいお

じさんに会って、私の友人に会って、「本が読めてうれしんですよ」とか、「お料理ができてとっても楽しんですよ」って仰るけれども、なんぞはからん彼女の心の中に入ったら、何とかして前向きに生きていく努力を、自らに課さなきゃいけない。ともすれば愚痴を言いたくなる自分を、無理にも本が読めてうれしんですよ、お料理ができて楽しいんですよと、いわば必死になつて、自分に言い聞かしている言葉であるんじゃないのか。いや、それに違いないやつという気が実は私しているんです。

諦めて生きる

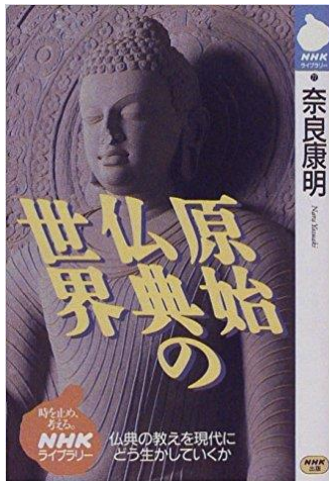
そのお嬢さんの前向きに生きていかれることを、本当に心から願っているんですけれども、実はその話を聞きながら、私の友人から聞きながら、私の頭にひとつ仏教の言葉が鳴り響き始めていたんです。それは「諦める」という言葉。

諦めるというのはごく普通の日本語であります。皆さんもお使いになります。ただ「諦める」というのはどういう意味かと言いますと、例えばいろんなことをやっただけけれども、どうにも道が開かれない、お手上げ、降

参、ギブアップ。仕方がない道を歩くに例えるならば、とぼとぼと肩を落として歩いていく。むしろそうしたちよつと後ろ向きな生き方が「諦める」という言葉の中に「ございます」でしょう。

実を言うと「諦める」という言葉は仏教の言葉なんです。諦めるという言葉の漢字を書きになれますか。言べんに帝国の帝を書きます。別の言葉ない？。その言べんに帝国の帝という字も書くんですが、今仰ったとおり明治の明、明るいという字も使うんです。そうしますと「明らめる」というのは明らかにする、明らかに知るといふ。

何を明らかにするのか、明らかに知ること、といったら、自分の置かれた今の現状を明らかに観て知ること。ですからそのお嬢さんでいうなら、身体不自由の身になってしまった



NHK『こころの時代』の副読本に
加筆・訂正をほどこしたご著書

という現実、これを明らかに観て、明らかに知って逃げ出さないということ。難しいんですよこれ。僕がプロポーズしたら彼女は「うん」と言ってくれた、なんて言うのはすぐ明らかに知るんです私ども。骨身に堪えて分かってしまてね、「ばんざーい」ってやってんですから。

ところがいやな事、しんどい事、辛い事、悲しい事は、なかなか自分の方で嫌なものですから、目背けちゃって、自分はこういう現実には置かれちゃっているんだという事を、なかなか明らかに観て取れないもんであります。

一番典型的な例なんですけれども、悲しいエピソードなんですけれども、私、書き抜きというか、新聞の切り抜きをとってあるんですよね。あるおばあちゃんがお孫さんの手を引いて幼稚園へ送っていった。角のところに来ました。その信号渡って向こうには保母さんかなにか迎えに来てくださったっているんですよ。おばあちゃん達がそこまで送って行つて、そこで信号が青になるのを見届けて、子供さんを送って「いってらっしゃい」って言うて、きつと手でも振っているんでしょね。信号が青になって、子供さん方が何人かまとめていったところへ、無謀運転のライトバ

ンが突っ込んで、子供さん何人か重軽傷を負つて、一人亡くなりました。そのおばあちゃんのお孫さんが。そしたら、そのおばあちゃんが亡くなったお孫さん泣いて抱いて、「お前は死んじやいない、おまえは死んじやいない」って絶叫していたという新聞記事。

つまりそのおばあちゃんにしても、頭の中ではお孫さんが事故で命を失ったって分かっている。分かっているながら認め難いんですこれは。だから死んじやいないって叫ぶんです。似たようなこといくらでもあるんで、とても信じられないなんて、しょっちゅう私どもも言うじゃないですか、嫌なことがあると。入学試験におっこっちゃったのもそうですよ。誰か親しい身内に死なれちゃったのもそうですよ。いろんな事があつて、嫌な事は、とてもとてもそういう現実にはぶつかっている自分というものを、そっくりそのまま悔しいけれども認めて、逃げ出さずにきちんと受け止めて、ということはおなかなか難しい。

でもそういう現実には置かれた自分というのを明らかに観る、明らかに知るといふひとつの自己認識、これが諦めるということの実は第一の意味なんです。

で、第二の意味があるんです。こっちの方

が重要なんです。第二は、そのこういう状況になっちゃったんだということを現実の上、どうやったら前向きに生きていけるかということ、朝から晩まで毎日毎日考え努力しながら生きていく、生きるというプロセス。これが諦める、明らかにしながら生きていくということの第二の意味なんです。

ひとつは、自分はこういう現実になっちゃちゃっているという自己認識、もうひとつはその自己認識の上に、前向きに生き続けていく努力をする毎日のプロセス。両方を含めて諦めると仏教では説くんです。だから諦めるのは一時「あ、俺はもう諦めちゃったよ」という事じゃないんです。毎日生き続けていく本当の意味で諦めながら生きていく生き方、それが諦めなんです。

そうなりますと私もしょっちゅういろんな事にぶつかりますでしよう、人生色々なんです。子供に死なれちゃったなんてこともあるでしよう。失恋しちゃったなんてこともあるでしよう。バブルはじめて財産ゼロになっちゃったなんて事もあるでしよう。ヒョイと上役の悪口を言ったら、上役の人が後ろにいて聞かれちゃったなんていう事があるでしよう。そういう時どうするんですかね。

少し漫画みたいだけれども、今申し上げた事を使いますと、「しまった」うっかりと上役の悪口を言っちゃたけど、当の本人が後ろにいて聞かれちゃった、という困った現実にはぶつかっているという自己認識をする、というのが第一というこういう事なんです。第一の諦めなんです。

第二、じゃあどうするのか。何とかしなきゃいけないんですよ。前向きの生き方で。だからそこで「えい、逃げちゃおうか」と考えたり、後ろ振り向いて「課長そこに居られたんですか、今私変な事言いましたけどね、ちよつと昨日の二日酔いが残って、自分で何言っただかわかんないんで、ついろいろんな事言うんですけれど、他意はないんですからどうぞ」なんて苦しい言い訳をするかもしれない。でもそれもまた諦めというかひとつなんです。つまり何らかのかたちで前向きにやっていく事が必要なんです。それ逃げちゃったらどうにもしようがないでしようね。

そんなこと考えますと、しょっちゅう私どもいろんな事やっているわけなんです。そのたびに私どもは、普通の意味じゃ困りますよ、本当の意味で諦め諦めしながら生きていく。それを諦めの人生って言う。

ところが諦めの人生なんて言いますと、皆さん絶対に誤解する。「あつそ、仏教は諦めの人生を説くの。そうか、後ろ向きな生き方を説くんですね仏教は。なんでももうだめ、おしまい、降参、とぼとぼと人生を歩いていくのが仏教なんですか」とおっしゃるかもしれないけれども、むしろ逆なんです。

現実になぶかったら現実から逃げ出さない、というのがひとつ。そういう自分をはつきりと認める。そして今度は未来に向かって、もしそれが色々な社会のある様とか環境とか、そうしたものを覚えてゆけば、そうした困った事がなくなるっていうんであれば、これは社会を良くするとか、世界を平和にととか、いろいろな動きにも連なっていくと同時に、つまり未来に明るい夢を託して努力を続けていく。あたりまえの事です。それを続けながら同時に、現実の自分の身に起こっちゃった事に対しては、何らかのかたちでそれを前向きのかたちで処理していかなければいけない。そういう生き方をこそ、実は諦めるという言葉で言うんですが。

嘆くのは無益である

実はこの諦めというその生き方、これが

仏教の基本なんです。例えば私はインド屋だ
って申しましたけれども、お釈迦さんにこん
な教えがあるんですよ。誰か身内の人が死に
ますでしょう。子供でも親でも連れ合いでも
いいですよ、誰か親しい人に死なれます。悲
しいですよ。そうしたら、凡そこういう事
をお釈迦さん言うんです。『親しい人が死ん
だ。悲しいと嘆いて、その嘆く事によって死
んだ人が生き返ってくるんなら、あんたも嘆
いていい。しかしいくら嘆いても死んだ人は
戻ってこない。嘆けば嘆くほど身も心もやつ
れていくだけだ。死んだ人はもう戻ってこな
いと思ひ定めて、嘆き悲しみを去れ』、なん
てこんな言い方をたし。

実はこの言葉も、私インドでヒンズーの行
者さんを機縁として、お釈迦さんと色々お話
を文献を通じてやるようになった時に、引ッ
かかった言葉のひとつでありまして、私それ
読みまして「何だよお釈迦さん、こんな冷た
い言い方あるか」って私っつてかかった記憶
があるんです。親しい人に死なれて、『悲し
い』って嘆き悲しんでいる人に、慰めの言葉
をひとつぐらいますかけたら良いじゃないか
なんてちよっと思ったりしました。

とにかく万物無常、命あるものは必ず死す。

お前の息子は無常の道理に従って死んだ。無
常は今更もとに戻らない。嘆いても無益であ
る。『嘆くのは無益である』と書いてある。誰
が役に立つか役に立たないかって判断して嘆
きますか。嘆きたいから嘆くんでありまして、
そう言はれると本当に困っちゃう。でも今に
して思うと、嘆き悲しみというものを乗り越
えるためには、そこまでの強さを持たなかつ
たら乗り越えられないと言う事は、その通り
だなあって、今、私は私なりに納得している
わけです。

だから結局、「死んだものは戻ってこない」と
思ひ定めて、嘆き悲しみを去れ」って言うの
は、「嘆いちゃいかんよ、悲しんじやいかんよ、
涙こぼしても駄目ですよ」って言うてるんじ
やないんです。涙流してもいいんです、嘆い
てもいいんです、身も世もあらず悲しんでも
いいんです。ただ悲しみつばなし、身を悶い
つばなしじゃ困ると。なんか立ち直る強さを
持ちなさいって言うんです。

だからこそ、そうした事にあつた時に、「死
んだ人は戻ってこないと思ひ定めて」って言
うのは、そうした身内に死なれちゃったって
いう現実を明らかに観て取って、そして前向
きに生きていく姿勢をそれから釈尊は説きた

すわけです。インドのお釈迦さんにもそんな
教えがございます。

無寒暑

いかに仏教がインド、中国、日本と、仏教
三国を通じて、同じ事が説かれているかって
事をちよっと申し上げたいから、今度中国の
例を出しますと、私ども禅宗であります、
洞山良介と言う偉い禅僧がおりまして、その
禅僧のところに雲水さんが来まして、「暑い時
寒い時どうすればいいか」って聞くんです。暑
さ寒さですね。そしたら禅師が「暑さ寒さのな
い国に行っちゃたらよからう」。

そんな国ある訳ないんですから、雲水さん
喜んで突っかって行くわけです。「いかなる
かこれ無寒暑の所」、暑さ寒さの無い所ってど
んな所かって言いました。そんな次の言葉がち
よっと難しいんですが、『熱時には闇梨を熱
殺し、寒時には闇梨を寒殺すべし』。闇梨と
いうのは阿闍梨と言う言葉の崩れた言葉なん
です、要するにお前さん自らをつて事なんで
す。「暑い時にはお前さんを暑さで殺しちま
え」。「寒時には闇梨を寒殺すべし」。「寒い
時には寒さでお前さんを殺しちまえ」ってこ
う言う。



晩年平成 28 年 10 月駒澤大学大学院で講演された奈良康明先生

なにも自殺しろって言うことじゃない。そうじゃなくって、暑さ寒さが現実のものとして、実際に起こっちゃたら逃げ出すな。だって逃げ出したって、起こっちゃった事なんですから、逃げ出しようがないんですから。「暑さで自分を焼き殺しちゃえ、寒さで自分を凍え死なしてしまえ」とこういう言い方をするんですが、本当の意味で諦めて生きると言う事の同じ事を言ってるんです。

災難に遭う時節には遭うがよく候

日本にまいるまして皆さまご承知の良寛さん、良寛さんも同じ事言っています。国上山の麓の五合庵にいた時に、有名な越後地震が起きました。大勢の人が亡くなりました。江戸にいる山田杜草という文学者仲間が安否を問う手紙を出しました。その返事というのが残っています。「地震は大変に候」。大変な地震でしたよと、沢山の人が死にましたよなんていう事を言いながら、幸いに私の親戚は無事だったと。だけど多くの人が死んで、私みたいな人間が生きながらへていて、とても悲しい。なんて言う事を言いながら、最後に良寛さんは、「災難に遭う時節には遭うがよく候。死ぬる時節には死ぬがよく候。これはこれ災難を逃るる妙法にて候」と、こう言いますね。

つまり災難に遭う（出遭うです）、災難に遭う時節（時節というのは時という事です）、これはごくごく一般論として、災難に遭うような時にはと言う一般論じゃなくて、災難に遭っちゃった時にはと言う方が正しい。現実の問題として災難が起こっちゃったら、「災難に遭う時節には災難に遭うがよく候」。その災難にぶつかっていきなさい、逃げなさい

など。災難にぶつかっている自分を明らかに知れど、こういう意味であります。

「死ぬる時節には死ぬがよく候」。こうなるとちよつと難しいね。死んじやった時には死ぬがよろしい、じたばたするなって言うのは。それできないから困っているんですよ。

そして実は最後に救いの言葉がありまして、「これはこれ災難を逃るる妙法にて候」。つまり例えば、身体不自由になっちゃって、片足が不自由になっちゃったという災難に出遭っても、それにぶつかりなさいと、逃げ出しなさんなど。そして毎日を前向きに生きていくプロセスを続けていく、それがかえって「災難を逃るる妙法にて候」。この場合、災難を逃るるっていうのは、今更交通事故が起らない昔に戻るという意味じゃなくて、身体不自由になっちゃったという状況、災難を逃るる、それを乗り越える強さが出てくる。こういう風に考えなきゃいけない事だろうと思います。

こういう事言いますと、さつきもちよつと申し上げたんですけれども、誤解されるといけないんで言葉を添えたいんです。つまり本当の意味で諦めると、現実の自分に置かれた状況を明らかに観るって言うんですが、これ

はあくまでも現実起こった状況を明らかに観るという事なんです。そして前向きに生きていくと言っていますが、そこにはあくまでもそういう環境とか、状況とか、社会の仕組みとかいろんな事があって、そういう不都合な面があったら、それは当然前向きに生きていく中に盛り込まれていくべき、その人その人への努力がなければならぬ。自分だけの世界に閉じこもって、自分だけが明らかにして生きていればいいんだ、というふうにいうと、仏教の生き方が、今度社会の中の生き方と接点がなくなっちゃうんで、大変な誤解になりますんでね。

食えなかったら食うな

実はそれに似たような会話を私したことがある。その今良寛さんの『死ぬる時節には死ぬがよく候』なんてそういう伝承が禅にあるから、関大徹老師という亡くなられた方です、現代の禅僧であります。その方が本を書いたんです。その題が『食えなんたら食うな』というんです。食えなかったら食うな。食べられなかったら食べなきゃいいじゃないかって、こういう一見開き直っちゃったみたいないん乱暴な表現であります。私に駒澤じゃないん

ですけれども、他の大学の経済を教えている友人がおりまして、色々仏教の事も読んでいる男なんです。

ある時その友人から電話がかかってきました。今晩出て来い。出て行くと大抵彼と会う時は赤提灯のある店が決まっている。そこへ行きましたら、その関大徹さんの『食えなんたら食うな』っていう本を持ってきたまして、『これ何だ』。『ああ、関老師の本でしょう、僕も読んだよ』。『怪しからん』と言っています。『どだい坊主というのは、社会が乱れたら乱れたなりに心を痛め、食えない人がいたら食えるように、いろいろと努力をするのが坊主の務めだろう。それなのに食えなかったら食うなって、切り捨てるとは何事だ。だから仏教は皆に信用されないんだ』と。

昔ね、「貧乏人は麦を食え」と言って物議をかもした偉い総理大臣がいたけど、まあ年ですかね私ども。今お笑いになった方は、池田元首相なんていうエピソードを記憶なんです。『貧乏人は麦を食え』なんて日本の経済成長が始まるスタート地点のころのエピソードですから。その暴言にも比して劣らない暴言である、困るなんておっしゃるんです。

そうじゃないんですね。つまりあくまで

も現実起こっちゃった事は現実から目を背けるな、と言う事を言ってるんであって、それで前向きに生きていくという時には、当然自分も前向きに生きていく。そのお嬢さんでいうならば、身体不自由になった状況の中で、どうやって自分の生きがいを見出していけるか、という事を一生懸命考えていくと同時に、そのお父さんも、私の友人が言っていましたけれども、その後そうした身体障害の方がより就職しやすく、より生きやすいような社会を創っていくための、いろんな仕事も始められているという事を聞きましたけれども、つまりそうした事は当然含まれてくるわけですねえ。そういう風に考えていかなきゃいけないと思います。

無常だから赤ちゃんが生まれる

実は今この『諦める』という言葉を、私現実の今私が置かれた状態、それを明らかに観る、逃げ出さないで自己認識。こういう言い方をしましたが、これをもうひとつ仏教の術語を使つてよろしければ、身体不自由になった方も、震災に遭つた方も、そういう状況にあった自分を明らかに観るという言い方は、別の言葉で言うと、無常に出会っているとい

うふうな言い方を、私どもはするのであります。

無常という言葉は、本日の講演の最後の方で、ちよつと説明を私どうしてもしておきたい。ひとつ覚えていただきたいと思うんですが、「無常」という言葉は仏教の一番基本的な真理観。仏教では世界をどう観ますかといったら、「無常であり縁起によつて生ずるものである」と。まあこう言うんでありますが、無常というのは読んで字のごとく、常無いという。いかなるものも変化のプロセスにある。実体的に永遠に連なるものはない。こういう意味です。

実はこの「無常」という言葉が皆さんの一番身近に使われるのは、おそらく全てのものが移り変わっていくという意味じゃなくって、もつと情緒的な形で使われる場合が多いと思う。昨日まで元気だった人が突然心臓麻痺で亡くなっちゃった。「ええ、昨日会ったんだよ。あの方が心臓麻痺で亡くなっちゃたの。信じられないねえ世の中って無常だねえ、はかないねえ」って言う使い方。

そうしますと、これは無常という事と人さんが亡くなるという事が両方になって、その人さんが亡くなるという無常の事実を、はか

ないという情緒的なかたちで受け止めているわけです。でもいつもはかないだけじゃないかもしれませんね。「えつ、あの人心臓麻痺で亡くなっちゃったの。世の中ってわかんないねえ、無常だね、万歳」なんて言う人がいるかもしれない。ちよつと人が悪いかもしれないですけどねえ。これは言い過ぎなんです。

実はインド以来「無常」という言葉が仏教の方で取り上げられるようになったのは、決して赤ちゃんが生まれるとか、家が栄えていくとか、国が盛んでいくとか、どんどんどんどん発生していく時の変化を捉えて、無常つて言った例はないんです。必ず減びていく死んでいく。そうした事を捉えて、無常と無常観というものが発達してきたんでありまして。だから無常というのが、生きている方がなくなる、栄えているものが滅びる。平家物語の初っ端じゃありませんけれども、「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり」というのが無常の基本のわけですが。

だけどそれをはかないと受け止めるのは私ども neanche、だからそれはどういうふうに受け止めたって構わない道理なんですが、はやい話が出産のお見舞いに参りましてね、「赤ちゃん生まれたんですってね、男の子ですってね、

よかったわね、あんた男の子ほしかったんでしよう、皆無事なんでしょう、ほんとにおめでとよかったわね、世の中って無常だわね、おめでと」と言つたって構わない。

なぜなら無常だから人は死ぬんです。けれども無常だからお腹の中の赤ちゃん大きくなつて「おぎゃあ」て生まれるんです。無常でなかつたら、無はとれて常なるものだったら、お腹の中の赤ちゃん石ころみたいに大きくならないじゃないですか。いや、妊娠するという事さえも起こらないに違いありません。つまり無常というのは、今日は時間がありまさんので難しい事は止めますけれども、いろいろな縁起によつて生じ滅していくという事が、別の言葉でいえば無常なんです。

すべてのものは縁起している、だから無常なんだ、とこういうことだね。ですから無常だからこそ人は死ぬんですけれども、無常だからこそ赤ちゃんも生まれる。だから「無常だわねえ。おめでと」というのはあながち理屈とすれば嘘じゃない。でもおつしやらない方が無難です。誤解されちゃうんで。

万物無常は自然科学の真理

実は日本では、無常というとはかないとい

う情緒的な受け止め方、これ第一にあるんです。まして日本の古代から平安文学の基調というのは、この「はかないねえ」という情緒的な無常観なんですから。ところが第二に、これが普通で皆さんがおそらく承知になっている、自然科学的な無常なんです。すべてのものは移り変わって止まるところがない、常に変化の過程にある。これがすべての存在の本当のあり方である、なんて仏教では言うんです。

実はこの言い方に対して、私一時ちよっと疑問を持った事があります。というのは中学、高校時代に物理というのを習いまして、そうしましたら今みたいに原子物理学が発展していない時で、原子と分子って言うんで教わったんです。そうすると水はH₂Oとか、原子というのはこれ以上分割できない実態であるなんて、習いましたでしょう。

それから大学に行って仏教というのをあらためて理論的に習いまして、すべてのものは無常である。「あれ、そうするとおかしいなあ」。原子というのは実態でこれは減びることがない。そうすると無常と食い違っちゃう、宗教的真実、そして科学的真実、宗教と科学の対立、なんて大きな事まで考えたりした事もあるん

ですが、最近は違うんだそうですね。その辺は私専門の事分かりませんが、専門家の話に聞きましたら、現在の中性子とか何とかというところまで研究が進んで、そうした物の本質は何かといったら、エネルギーと波動だつて仰ってました。

エネルギーと波動でどう違うんですか。ある所から見れば波動で、ある所から見ればエネルギーでつて、何言われてるんだかよく分からないんですが。とにかく「でも先生、固定した無変化の実態じゃないんですね」と言ったら、「無変化と違います」と仰ったから、幸いに万物無常という真理は、自然科学の方から見ても今は矛盾しない真実だと、こう言っているのだらうと思います。

私が無常と受け止める

これが第二なんです。実は私は「仏教の無常という事が自然科学に合致するから、仏教は素晴らしい教えなんだ」ってもしも言われると、すごく私は抵抗がある。現にアメリカの若い学生諸君と私議論した事がある。「仏教は極めて科学的だから、私は信ずるに足る宗教であると思ってる」。それだったら仏教なんて信じないで、科学信じたらいいじゃない

いかつて私は言いたい。違うと思うんです。つまりそこに無常という真実の、第二の、そしてもっとも仏教的な受け止め方が出てこなければならぬ。それは何かと言ったら、今のすべてのものの、いいですか主語は「すべてのものは」でしょ、すべてのものは無常である、移り変わるものであるという言葉を、第三番目になったら主語を変えてください。主語を一人称に変えて「私が」と入れてください。『私が無常なんだ』と。

そうしますと、私が身体不自由という無常の事実につかっている。私が今試験に失敗したという無常の事実につかっている。私がか今悪口を言ったら上役に聞かれちゃったという無常の現実につかっている。私が、つまり無常というのは仏教宗教なんです、生き方なんです。

お釈迦さんは徹底して生きる道を説いてる。形而上学を説いたのでもなければ、科学的真実を説いたのでもないんです。徹底して私どもが生きる道を説かれたんです。だから無常という事を説いた時に、自分がここにいて無常というのをそつちに並べて、無常とは云々しかり、いやそう説いてもいいんだけど、もうそうじゃなくて、私が無常なんだっていうふ

うに受け止めないかぎり、無常は仏教の無常にならないと思うんです。

無常を生きる

そうなった時に先ほど来申し上げてまいりました、本当の意味で諦め諦め諦めしながら生きていく前向きな努力、これが実は仏教の方で無常を生きるという言葉を使います。無常を観るといふ言葉も使います。この観るといふのは、易しい方を見るではなくって、見物するの見ではなくって、観察するの観を書いてください。無常を観る、あるいは無常を生きる。自然科学的な真実ならこういうものだと思えばいい、人に説けばよい。

ところが無常を観るとか無常を生きるという事になると、先ほど来申し上げてきましたような、本当の意味で諦め諦め生きていく道。そして無常とは、仏教の依って立つ大きな真実であります。仏法と言ってもいいんでありますけれども、むしろそうしかたがちで無常を生きる、無常を観ながら生きていく。

無常を生きる、無常を観る、決して「あつ、僕はもう観ちゃったよ」とか「生きちゃったよ」って言えるもんじゃないんで、死ぬまで生き続けていくものでありましょう。そんな

った時に初めて、その無常という真実に身を随順させながら生きていくからこそ、それをこそ、仏教の方では仏に出会いながら生きてくとか、仏として生きるという言い方をするんであります。これが仏教の特色です。

キリスト教の方で人間が神になるという表現は許されません。それはそれでまた別個の非常に精神性の高い宗教ですから、それはそれでよろしい。仏教に関して言うならば、仏教というのは仏の教えであると同時に、その内容を言うならば、仏になる教えだということが可能であります。いや、そうでなければならぬんです。

そうして本当の意味で諦め諦め生きていく、無常を観ながら生きる、無常を生きる。それが実は仏として生きる、あるいは仏に出会いながら生きる。むしろそうしたところにこそ、本当の自分というものを確かめながら生きていく道が開けていく。そういうもんだらうと私思っているんです。

こういうと「なんだい、ずいぶん年とったなあ」と言われるかもしれないですけれども、最近やつぱり年とったんですかねえ、「お前もそのうちにお医者さんからもう駄目だよ」って言われるであらうと。いつか知りません

けど、その時にどうするかなあ。願わくは「まあそうですか、まあしょうがないですね。まあでもいいや。私は一生懸命及ばずながらも一生懸命生きてきたから、いいとするか。」と言って死にたいなあ、なんて言う気が私にある。

そんな時に坐禅しながら死にたいなんて私夢にも思いませんねえ。そんな時に「俺は死は恐くない」なんて言うのは、思いたくないですねえ。恐かったら「死にたくない」って言うかもしれません。私はそれで良いと思っております。本当にそうなら、何にもやらないで「死にたくない」と言ったら、これは禅を勉強してきた人間の死に方としてはゼロ。ゼロって良い悪いじゃなくて、無色みたいなもの。

やつぱり禅なら禅という世界に縁があつて、導かれて、及ばずながらも少しずつやつてきた人間として、そんな時に、「死にたくないなあ」って言ったら、「死にたくない」って言ったって私はいっこう構わない。それが自分に素直な生き方だろうと思います。

だから私もどうなるか分かりませんよ。ただそんな時に、今こう元気な時に思うのは、「あつそう、私死ぬんですか。死にたくないけどなあ、まあいいや。僕は一生懸命まあまあ

それでも生きてきたからなあ」って言って死にたいなあというのが今の心境です。

それをふっと裏返しにしますと、やっぱり自分で思うんです、我田引水じゃありませんけど、今日皆さんに喋ってきたような諦め諦めでもいいや。無常を生きるでもいいです。無常を観るでもいいです。そうした生き方をとにかくずっと続けてこなかったら、そういう心境にはならないのも間違えないだろうなあ、というそんな感じがいたしました。一〇

〇パーセント出来るわけじゃないんだから、ただ及ばずながら、何とか努力して生きていきたい。まあそんなような感覚で実は私こういう事です。

時間が少し過ぎてしまいましたけれども、「私ってなあに」という「私って何でしょう」と言うことでありますが、結局私って何でしょうというのは、そういうなにか私とはこれこれしかじかというんじゃないくて、やはり生きていくということの中から、本当の自分のものを探していく。私なりに考えていることを少し申し上げさせていただいて、講演に代えさせていただいたわけでございます。ご静聴大変有り難うございました。

(この原稿は、平成八年一月四日に長全寺飛雲閣で行われた、龍泉院参禅会二五周年記念講演会での、奈良康明先生のお話を記録したものです)



記念講演会の後、奈良康明先生を囲んでの懇親会

奈良康明先生を偲ぶ

龍泉院住職 椎名 宏雄

この世は無常であります。昨臘二月一日、奈良康明先生が世寿八九歳で遷化されました。文字どおり断腸の思いです。先生は宗門の至宝であつたのみならず、日本仏教界における泰斗であられました。

宗門人としての先生は、東京下谷の法清寺住職の傍ら、駒澤大学教授から総長まで務められました。また晩年には福井県吉峰寺を董され、大本山永平寺西堂の要職にあつて、つねに永平寺の修行僧や宗門人のために、深い学問的造詣に基づく布教教化に尽され、おおきな感化を与え続けられた高德者でした。

ただ、先生は宗門の要職者としてよりも、広く仏教界一般や知識人からは、その多くの平易な著述や講演、そして永らくのNHK「この時代の」の司会者を務められた一八年間などを通じて、全国的に学殖の深い仏教界の碩学という評価が高かつた方であります。わたくし個人としても、そうした方面から薫陶をいただくことが多かつた者です。

龍泉院では、平成八年に参禅会発足二五周年記念行事の一環として柏市長全寺さま飛雲閣を会場に「禅を聞く会」を秋に開催し、講師に板橋興宗禅師とともに奈良先生をお招きしたことは、忘れ難い憶い出であります。当

日、わたくしがJR柏駅まで先生をお迎えに参つたところ、先生にはすでに三〇分も早く到着して駅前周辺を散策され、久しぶりに訪れて変貌いちじるしい景觀がとても懐かしく印象的だ、と語られました。先生は隣の松戸市のお生まれであり、経歴にはいつも「千葉県の子」となされておられました。

右のご講演は、四百名も集まつた聴衆が、あるいは水を打つたようになり、あるいは爆笑しながら、とても身近で分かりやすい中に内容の濃いお話を拝聴し、大きな感銘を与えられました。終わりの拍手はいつまでも止まりませんでした。事後、先生にはお疲れにもかかわらず、わたくしたちの懇願の席にも快くご出席ください、会員さんたちと親しく語られました。

先生は、中村元先生の秘蔵つ子といわれる碩学かつ要職者でありながら、つねに謙虚な学究者であり求道者でした。宗門の現代教学研究部門の協同研究では、若い学究者の斬新な意見には双手をあげて賛意を表されるだけでなく、「そんなよいことは、もっと早く云つてくださればよかったのに」と。こういった温情愛語は、若き学徒にとつてどんなに励みと自信になったか、申すまでもありません。

わたくしも、そうした温情に浴したことが何度かありました。まだ六、七年以前、先生から長文の印字の書簡が寄せられ、現代の日本仏教界が行っている葬祭や祈禱などの実践行事を「仏教文化」としてとらえ、そうした事象の学問領域を「仏教文化学」として仏教学の中に位置付けたいが、忌憚なき意見を乞うとの内容でした。わたくしはかくも重いテーマの諮問に恐縮し、全力を傾倒してご返信しましたが、はからずも先生の謙虚さと理事円融の願いを教えられ、畏敬の念にうたれました。

先生は、このように日本仏教の教理と実践の乖離という現状に強い関心を抱かれ、その相即融合のために学界を通じて少しでも与したいと願っておられたのです。その実現は容易でなくても、将来かならず大きな影響を与えるとわたくしは確信いたします。先生はつねにブツダの二本柱は「智慧」と「慈悲」と言及されていましたが、それはまさしく仏教教理や実践を「自身の問題」としてとらえ、斯学に対する「自身の『智慧』と『慈悲』」の発露でありました。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

合掌

龍泉院参禅会簡介

【参 禅】

一、定例参禅会

- ・日 時 毎月第四日曜九時(初参加者は八時半)来山、正午解散
- ・坐 禅 口宣、坐禅、経行、坐禅の順

(坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分)

- ・講 義 木版三通、開経偈、『正法眼蔵』の提唱

- ・座 談 自己紹介・喫茶・座談、

一、自由参禅

- ・日 時 毎月第一日曜と第二土曜九時から正午まで

- ・坐 禅 九時から一一時まで(入退堂自由)

- ・作 務 一一時から正午まで坐禅堂掃除

※会費無料、年齢・性別など一切不問、初心者には懇切に指導

〔年間行事〕

- 一、一夜接心 本年は六月二・三日、一泊し七炷の坐禅と提唱等

- 一、成道会 本年は二月二日、坐禅二炷・法要・問答・法話等

- 一、他の行事 涅槃会(二月一五日)、花祭り(四月八日)、施食会

(八月一六日) 手伝い、歳末煤払い(一二月例会後)

- 一、作 務 毎月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等

【会報誌】

- 一、『明珠』(四月八日と一〇月五日発行)

- 一、『口宣』(年一回)

〔ウェブサイト <http://www.ryusenin.org/> 〕『明珠』『口宣』の

バックナンバーがご覧になれます

龍泉院

参禅会会報

明珠六九号附録

●発行／天徳山龍泉院

千葉県柏市泉
81

☎
04
(7191)
1609

